豆紙人形作家・武藤さんしのび

パリの教会で遺作展

手のひらサイズ 日本文化に感動

【パリ27日井手季彦】八十八歳で豆紙人形を作り始め、昨年九十三歳で亡くなった北九州市門司区出身の武藤正子さん＝作家名マサコ・ムトー＝の追悼展が二十七日、小説・映画「ダ・ヴィンチ・コード」の舞台となったことでも知られるパリのサン・シュルピス教会で開かれた。

故武藤正子さん

武藤さんが少女時代を過ごした山口県下関市の先帝祭をテーマにした人形や遺作となった「東海道五十三次」など約五十点を展示。パリ市民や観光客らは「わずか三㌢から五㌢の手のひらに乗る小さな人形の中に、日本文化の粋が込められている」と感動していた。

武藤さんは、右目の失明や夫との死別を乗り越え、七十歳からパステル画を習い、八十八歳で豆紙人形づくりを始めた。がんと闘いながら、大正時代の風俗や昔話の記憶をたどって制作を続け、昨年六月に亡くなった。

二〇〇四年に二女のエッセイスト、ヒロコ・ムトーさん(六二)＝神奈川県在住＝と友人らの協力でパリで展示会を開催。その際に作品を見たパリ在住のペルー人と日本人の夫妻が「ぜひパリの教会でも」とヒロコさんに申し出たことから、今回のサン・シュルピス教会での追悼展が実現した。

武藤さんはキリスト教徒でもあったことから、聖書についての作品も展示。ヒロコさんは「母の作品が日本とフランスの人たちの心を結んでくれていることがうれしい」と話していた。

作品は、三十日からパリ日本人学校や現地のジャン・ド・ラ・フォンテーヌ校でも展示。武藤さんを題材にした本「手のひらのしあわせ」の朗読や創作ダンスも披露される。

故武藤正子さんの豆紙人形を熱心に見るフランスの子どもたち　＝パリのサン・シュルピス教会